瀋陽だより

2015 年 11 月

報告者：東北育才学校
高井　奈央子

日本語教師の集い（in 大連）

10 月 25 日（日）、大連にて「第 2 回日本語教師の集い」が開催されました。「第 1 回日本語教師の集い」は昨年瀋陽で開催されましたが、第 2 回は大連での実施となりました。

前日に高速鉄道で大連入りし、翌日から発表やグループワーク、パネルディスカッションを行い、そして夕方には高速鉄道で帰るというスケジュールだったため、この集いで仲良くなった日本語の先生方と慌ただしく連絡先を交換してすぐに別れることになってしまいましたが、大変充実した一日でした。

瀋陽での日本語教育は、主に学生が対象ですが、大連の場合、どちらかというと社会人を対象とした日本語教育の方が大きなウェイトを占めているようです。会場となった数碼広場には多くの日系企業が集まっており、その近辺に聳えるマンションに住む日本人も少なくありません。また日本を対象にビジネスを展開している企業も集中していることから、必然的に「働くための日本語」を教えることが多くなります。

学生を対象に日本語を教える場合、「敬語は留学先の先生やホストファミリーに対して失礼の無いように」という観点で指導しますが、社会人を対象とした場合「お客様に失礼の無いように」というレベルで教える必要があります。コールセンター勤務の場合はクレーム対応のための言い回し、エ

ンジニア職であれば機械や IT の専門用語まで教えなければなりません。大連ではそれぞれの企業が自分たちに必要な日本語教育を施すべく、日本語教師を雇い入れているようです。

DLSP 大连软件园 数码广场 8号楼 www.dlsp.com.cn

リーマンショックの時期に、沖縄の方が人件費が安くなってしまったため、コールセンターが沖縄に移転して日系企業の数が減少したこともあったようですが、それでも瀋陽に比べれば圧倒的に外資系企業の数が多く、また外国人も珍しい存在ではありません。ここ大連ではもはやバイリンガルであるだけでは就職できません。良い職を得るためには、「母語＋英語＋第 3 の言語」という条件が必須です。そのため、日本語ができるだけでは就職できないようになってきているそうです。

日本留学が盛んになればなるほど、日本語を話せる人材の数も増え、その分就職競争が激しくなってしまうのでしょうか。あるいは日本の市場縮小や国内志向が影響しているのでしょうか。経済に明るくない私では、個人的な推測をすることしかできませんが、もしかしたら「バイリンガルでは能力不足」という現実は、世界的に見ると当たり前のことで、日本がガラパゴスなのだという可能性もあると思います。

日本に暮らす学生たちはこのことを知っているのでしょうか。海の向こうには、英語ができるだけではもう決定打にはならない世界があるということは、日本ではあまり知られていません。日本の教育費は高く、また奨学金も大抵の場合は返済しなければなりません。そのため、多くの日本人にとって留学というのはかなりハードルの高い教育であることは否めません。しかし、このままでいいのだろうかと、日本の将来が不安になりました。

中国でも教育費は高いですが、優秀な学生には無償の奨学金や賞金（弁論大会の優勝賞品だったりすることもあります）が支給され、次々と海外へと飛び出していきます。彼らは英語を話せるだけでは生きていけないことを知っているので、懸命に第 3 の言語を勉強するか、英語圏で技術や知識を身につけるかの道を選びます。

大連では「日本語を流暢に話せる」のではなく「日本語を母語とする人と同じレベルで話せる」人材を育成することを目指しているそうです。なぜそこまでするのかというと、実はクライアントである日本本社の要求なのだそうです。個人的には、相手方の商品や技術が確かなものであれば、意思疎通ができる日本語で十分なのではないかと思うのですが、ビジネスの世界には私の知らないニーズがあるのでしょう。しかし、いつまで日本が他国に対してこのような要求ができる立場でいられるのかは分かりません。

「母語＋英語＋第 3 の言語」――日本の若者が、この力を身に付けられる環境が整備されることを期待しています。

日本文化紹介イベント

東北育才学校の国際部から、日本文化紹介イベントをしてほしいとの依頼を受けることがあります。前回は日本文化クイズ大会でしたが、今回は日本の食べ物を提供しようということになりました。とはいえ、ここは瀋陽。大連と違って、入手できる食材も限られていますし、「家庭科」という科目がないので、生徒が使える調理室もありません。

高校３年生の孫君と私たち日本人教師が相談した結果、お好み焼きとたこ焼きならできるのではないか、という結論に至りました。

幸い、同僚の一人が調理師免許を持っていたので、美味しいお好み焼きの作り方を指導していただくことができました。

廊下に長机を並べての調理でしたが、普段家の手伝いをしている生徒は手際よく、手伝いをしない生徒はおろおろと机の周りを歩き回り、お好み焼きとたこ焼きを作っていました。

食べ物の力は偉大です。お好み焼きとたこ焼きを求める中国人の子どもたちや、他の国（多すぎて特定できませんでした）の子どもたちがひっきりなしに訪れ、調理担当の生徒たちの昼食分が不足するほどの盛況ぶりでした。

日本でもホームルームで調理実習をやると、時間が足りずに次の授業まで後始末をしていることがよくありますが、こちらでも同様でした。昼休みだけではなく、次の時間丸々１コマ分が後片付けに費やされましたが、その時間は私の日本語の授業だったので特に問題は発生しませんでした。これが数学や物理の授業だったら、こうはいかなかったかもしれません。

とはいえ、調理をした生徒たちも、食べに来た国際部の子どもたちも楽しそうだったのが何よりだったと思います。

中国生活

★冬到来

今年も冬がやってきました。11 月初旬にセントラルヒーティングが始動するので、毎年この時期になると一気に大気汚染のレベルが上がります。まず初めに、手で掴めそうな黒い霧が漂い始め、1－2 日すると、道を一本挟んだ公園も見えなくなるほどに悪化します。

どうやら今年の瀋陽の汚染は中国 No. 1 だったらしく、中国国内のみならず日本でも瀋陽の名前がニュースになっていたようです。私はややアレルギー傾向にあるせいか、この時期はいつもに増して鼻がムズムズし、風邪をひいたわけでもないのに痰がよく出るようになります。

こんな日は流石に公園で運動する人もいない――わけではなく、ちゃんと日課をこなしていらっしゃる方々がいらっしゃるのは流石というべきなのでしょうか。生徒たちの話によると、この汚染がピークだった日、瀋陽市の学校は休校にするよう勧告が出ていたらしいのですが、育才学校はいつも通り授業を行ったのだそうです。

生徒たち同様、私はこの問題はそのうち解決されると思っています。なぜなら、それは技術的な問題で、代替エネルギーや新しい設備といった物理的なもので解決できることだからです。一番変革を受け付けないのは、世代を通して受け継がれる人間の価値観です。生徒たちがこの大気汚染が問題だと意識し、できれば自分たちの力で何とかしたいと思っているのなら、彼らが大人になるころには改善されていると信じています。特に留学を経験し、外部の世界を知っている生徒がこの国の行く先に大きな影響を与えると思います。

こんなに大気を汚しているにも関わらず、私の部屋の暖房はパソコン並みの温かさなのが大変残念なのですが、仕方がありません。オイルヒーターを買い足して冬を越すことにしています。同じ瀋陽市内でも、建物によって「暑くて室内では半袖」ということもあるし、私の部屋のように「寒くてほとんど暖房の意味がない」という場合もあるようです。寒くても他の暖房器具を買い足せば、何とかなります。

物理的に快適であることだけが人生の豊かさではありません。中国の素敵な所は、皆が家族を大事にし、時間的に余裕があるので他人にも優しくできる所です。